

中部ニュース

シネスコ版

雑誌) = 2-ス no 148
雑誌) = 2-ス no 176
中口 = 2-ス no 189

No. 5 1 3

38. 11. 15

トランプアップ一輪
特集

魔の土曜日

東と西の大惨事

十一月九日、東と西それは血にそめられた、魔の土曜日でした。横須賀線の二重衝突、九州三井三池炭鉱三川鉱の炭じん爆発は、一瞬のうちに大惨事をひき起し約六〇〇人の尊い生命が失われるという、のろわれた日となったのです。

即ち、福岡県大牟田市三井三池炭鉱、三川鉱で大音響とともに炭じんが爆発死傷者九百二十二名(死者四百五十二名)を出す、戦後最大の大炭鉱事故を起したのです。

多数の生命をうばい、悲しみの一夜を明かした三川鉱は坑口の建物はガラスを砕かれた無残な姿をさらけ出しています。

この大惨事を招いた三井三池炭鉱は我が国でも最も坑内設備や機械化の進んだ炭鉱だったので。しかし三川鉱は最近三池炭鉱は小さい事故が相次いで起り、通産省鉱山保安局長から警告を寄せられたばかりの出来事だったので。

坑内には四百五十数名にも及ぶ遺体が次々と運び出され、変りはたてた肉身を求めてとりすがる家族の涙は痛々しいばかりです。

炭鉱が人柱的採炭といわれた時代ならいざしらず、人命尊重のいま三川鉱の炭じん爆発事故は合理化という不合理を、もう一度真剣に考えて見なければならぬようです。

十一月九日、夜九時五十分、横須賀線鶴見駅と新子安駅の間で貨物列車の後尾三両目の貨車が脱線、そこへ横須賀線上り東京行きが衝突、はねかえって同じ横須賀線下り逗子行きの電車の四、五両目に衝突。死者百六十、重軽傷者七十二と、昨年五月の三河島事故をうわまる惨事になったのです。

もう二度とくり返すまいとちかかった事故をまたくり返してしまつたのです。現場では、折から降りだした秋雨の中を冷たい無惨なむくろになって犠牲者がつきつきに運ばれてゆきます。病院につきつきと運び込まれる重傷者もあいついで息を引きとってゆきました。アットというまの防ぎよりのなかつた事故、貨物列車が四分遅れ、下り電車がわずか一分遅れ、不幸な出会いとなったのです。

びっしりつまつた国鉄の阿米の目ダイヤが今度の大惨事を呼んだものといえるでしょう。横須賀線といい、三池炭鉱といい、共通していることは根本の点において安全に対する考え方が、あまかつたといえるでしょう。無残な犠牲者はなにをうかつたのか、うかつたのか、うかつたのか、うかつたのか。

6970